
RENN

PEACH

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R E N N

【Nコード】

N 2 7 0 7 B A

【作者名】

P E A C H

【あらすじ】

天才美少女、鈴音 煉はその天才的頭脳で様々な不可解な疑問を解決していく。まだ小学生だというのに大人でも解けないような問題を解決していき、世間からも注目されるような存在となっていた。そんな中、煉を狙う怪しい組織が動き出す！ 煉は大嫌いな姉、燐と協力して組織の謎を解き明かす！！

ブローグ

「レン様、今日もおきれいですー!!」

「レン様、お持ちしましょうか?」

「何言ってるんだよ! レン様の鞆はこの俺が持つんだよ!」

「何言ってるやがる、俺だー!!」

「…うるさいなあ。」

ド派手なゴスロリを着て、ランドセルをしょっている小さな女の子、
鈴音 煉^{れん}。

彼女はその小学生とは思えない美貌で男の子をトリコにしていた。
彼女には可愛いという言葉より、美しいという言葉の方が似合う。

「鈴音さん、今日も男の子にモテモテね。」

「見てよあのドヤ顔!! ホントむかつく!!」

「何よ、ちよつと綺麗で頭いいからって。」

そう、彼女は天才だった。成績がいい? そういうわけじゃない。たしかに彼女は100点以外は採ったことがないような秀才だが、とにかく天才なのだ。

そんな天才美少女は自分の悪口を言っている女子3人グループを見つけると口元に笑みを浮かべた。

「た、確かに綺麗だけど・・・ホントに綺麗・・・。」

煉の笑みは女の子までもトリコにしてしまう。

しかしその時の煉の顔は、目は笑っていないかった。

煉の笑みにはメッセージが隠れている。

煉が笑ったとき…それは警告。

そのメッセージに気づく者はいない。

煉は笑顔を見せない。

たった一人の家族にさえも。

煉の家族は一人だけ。姉の鈴音 燐^{りん}

燐は煉が嫌いだった。4つも年上の自分をちっとも姉だと思っていないから。

それに自分とは違い美少女で天才で。

母に自分が妹を守ると誓ったのに妹はなんでも自分でしてしまう。少しは姉の自分に頼ってほしい。

そんな姉の想いにも気付かずに煉は自由気ままに生きていく。そういう可愛げのない煉が燐は嫌いだった。

天才美少女はどんなことも解決する。

プロローグ（後書き）

この小説を読んでくれた方々、ありがとうございます。
ミステリー系を書くのは初めてです！！

これから煉はざまざまな謎を推理し、解き明かしていくので楽しみに
していただけたらうれしいです。

また、これからは煉を狙う怪しい組織も動き出します！！
これからもよろしく願います。

事件の前兆…

「鈴音 煉… ホントむかつく!!」

「一回痛い目にあわせてやるわ。」

「…おはよう…。…」

燐は目覚まし時計3つに起こされて、しゅしぶりビングにやってきた。

そこにはすでにお馴染みのゴスロリを着たド派手な少女が朝食を食べていた。

「おはよう、燐。」

「お・ね・え・ちゃ・ん、でしょ!!」

燐はいつもこのセリフを言っているが、煉が自分をそう呼んだためしがない。

煉は燐のことを姉とっていいないから。

「アレ?? 私のふりかけがないんだけど…煉!!」

「何? もう、朝っぱらからそんなでかい声出さないでよ。うるさいんだけど。」

「むっか… 私のふりかけ盗ったのアンタでしょ!!」

「だから、うるさいって。私がふりかけなんて子供じみた物、かけるわけないでしょ。」

「何言ってるのよ。この家には私とアンタの2人しかいないのよ。」

「はあ… 私じゃないってこと、証明してさしあげましょうか?」

「い、いいわよ。聞いてやろうじゃない。」

「ズバリ、犯人はア・ナ・タ。」

燐は背筋がゾクリとした。（別の意味でも…）

「まず、ふりかけはその棚の中。」

燐は煉が指差した棚の方に歩み寄った。おそろおそろ棚を開けてみ

る…

「フン、ないじゃない!!」

「そうね、簡単に見つかるようなところにはないわ。棚の中に、本があるはずよ。」

「え、ええ…」

「でも、それは本じゃない。本のように見せかけた入れ物。最近よく雑貨屋で売ってるやつね。きっとその中に入ってる。」

「…なんでこれが本じゃないことを知ってるの…?これを買ったのは私で、アンタはそのときいなかったじゃない…」

隣はだんだん気味が悪くなってきた。

「まあまあ、落ち着いて。まだ私の推理は続いている。」

隣はとりあえずその本型の入れ物を開けてみた。

中には毎朝見ている大好きなアレ…

「私の、ふりかけ…」

「ね?入ってたでしょ?さて、私の推理の続きよ。問題はなぜその中にふりかけが入っていたのか…」

それは昨日の朝の事。昨日もふりかけをかけたあなたはふりかけがあと1つしかないことに気付いた。最後のふりかけを妹に盗られたくない…そう思ったあなたは妹でも見つけれられないようなところに隠した。それがそこだったってわけ…どう?あたってる?…」

「あ…昨日、確かに…」

煉は得意げにニコツと笑った。もちろん目は笑っていない。

「それでは、なぜ私が隠した場所がわかったのか…まず本のことについてよ。あなたはその本を買って帰ってきたとき、私に『見て見て!!本買ったのー!!』とわざわざ言ってきた。それは私にこれは本なんだと思わせるため。それにあなたがそんな英語で題名が書かれたような本を買うわけがないし。」

隣はムカツとして何か言おうとしたが、妹の推理の続きを待った。「きつとその本は私から何かを盗られないために買ってきた物ね。じゃないとあんな本だと思わせるためのアピールをしないものね。」

だから、あなたが昨日の朝、コソコソしているのを見てすぐにわかったわ。毎朝かけてるんだから、ふりかけがそろそろなくなる頃だっというのはわかっていたしね。」

「…返す言葉もございません…。」

「ほんと、困ったお・ね・え・ちゃ・んだこと。」

「むっか~~~~!!!!」

いつもならここで姉の権利を使って妹をこてんぱんにしてやろうというところだが、ここまでカンペキに推理されるとどうしようもない。

「は、はやく学校に行きなさい!!」

「はいはい。」

煉は似合わないランドセルをからって、なぜか姉よりもはやく家を出た。姉の中学校の方が遠いのに。

きつと燐が遅刻するのだろう…。

煉は真黒なロングの綺麗な髪をなびかせて、フワフワのスカートを揺らしながら廊下を歩いていった。

「おはよう、鈴音さん。」

「あら…。」

あまりにも珍しい人が挨拶をしてきたので少し止まってしまった。

「…おはよう、上木さん。」

いつものように口元だけに笑みを浮かべて棒読みの挨拶をした。

「珍しいわね。大嫌いな私に挨拶をするなんて。」

そう、挨拶をしてきたのは小学1年生の頃から煉を嫌っていた上木

沙弥だった。

「あらやだ。大嫌いなんて…そんなわけないじゃない…。」

その時の沙弥の顔は全く笑っていないし、煉と同じ棒読み。

あきらかに煉が嫌いだとアピールしている。

沙弥が煉を嫌いになったのは会った瞬間からだった…

小学校入学式。

沙弥はもの凄いい目立ちたがりやだった。なのでひとときわ目立つラメ入りのフリフリ…いや、どちらかというとプリプリスカートをはいていた。

しかし、皆の視線は沙弥に全く向いていない。皆は真っ赤なりボンを頭に付けたゴスロリの少女に注目していた。そりゃ、そんなド派手な衣装を着ていれば注目されること間違いなし！！だが、それだけではなかった。その少女の美しさといったら…もう言葉にならなかった。皆が、沙弥もその少女に見とれている。だけでもちろん沙弥は気に入くない。それから煉の名は沙弥のブラックリストに載せられた。

クラス表を見たとき、沙弥は心底がっかりした。なぜ、なぜ神はこんなにもたくさんクラスがあるというのに気に入らない少女とクラスを一緒にしたのか？いや、これは神が私にチャンスにあたえてくれたのかもしれない…あの少女を見返してやるチャンスを！！沙弥はクラス表の前で一人、決意表明をしていた。鈴音 煉より目立つてやると。

しかし、そううまくはいかない。あるとき沙弥はクラス男子の話を耳にした。

「上木 沙弥もけっこう可愛いよなあ…俺は好みかも。」
それを聞いた瞬間ひとりでガッツポーズ。

「でもレン様には勝てないだろー。」

「そりゃあ、レン様に勝てるヤツなんていねーよ！！」

「上木も、せいぜいクラスで2番目に可愛いってどこか。」

「ああ、レン様は宇宙一だけだな！アハハハハハ。」

沙弥はもう、覚悟を決めた。

ある日、仲のいい女子5人をひきつれて、煉を脅してみた。しかし…
「あなた達、そんなことして楽しいの？ つふ、なんか悲しくなってきたやうわね。その…上木…だっけ？あなたって女子何人かと

つるんでなきゃ私に文句の一つも言えない臆病ものだったの??はあ…呆れた…もう二度と話しかけないでくれる?」

沙弥はこのセリフを今でも覚えている。

次に、煉が大切そうにしている黒ネコの柄がついた筆箱を隠してやった。しかし、すぐに見つけてしまふ。そしてこちらをチラッと見ると、

「あなたが隠しそうな場所よね。もっと上手に隠せないの??」

…もうさすがに限界だった。

今度はヤツの筆箱をハサミで切り刻んでやった。しかも目の前で。それでも泣かないだろうと思っていた。が、その無残な筆箱を両手で持ってほろほろ泣きだした。沙弥もさすがに焦ったが、次の瞬間、絶望で満ちた。教室のドアがガラツと開き、自分たち以外は誰もいなかった教室に男子3人が入ってくる。

「どうしたんですか、レン様ー?急に呼び出して…って、レン様!？」

男子3人組(喧嘩、負けたことありません、ズ)は泣いている煉を見るなり、あわてて煉に駆け寄った。

「レン様?大丈夫ですか??…その筆箱…」

喧嘩、負けたことありません、ズは煉が持っている筆箱を見て、女子6人組み(イジワル、ズ)を見た。

「お前ら…やっていいことと、いけないことがあんだろ!!」

キレル喧嘩、負けたことありません、ズに煉は

「い、いいの…今はとりあえず出て行ってくれるかな?」

「あ、はい!!承知しました…お前ら、覚えとけよ!!」

さすがに喧嘩、負けたことありません、ズなのでイジワル、ズもビビる。

イジワル、ズもやりすぎたかな…と思ったので、泣いている煉に近寄った。が、

「あーあ、私の嘘泣きに騙されるなんて、まだまだね。あら?あなた達も騙されちゃった??」

「えっ・・・」

イジワル'ズ、皆目がテンになっている。

「よかったー。ちょうどあの男子を呼んでおいて。あなたたち、あればなのよ。だって女子6人が一気に人目の付かないようなところに行くのよ？そんな大人数だったらすぐに気付いちやうじゃないだから私はあなた達のをつけて作戦を聞いちゃったわけ。ちなみにこの筆箱は先生のよ。誰のかしらね？」

先生全員に訊いて回って見たら？？ま、そんなことしたら訊いた先生全員にあなた達がしたこと、ばれちゃうけれど。」

ハメられた…おかしいと思った。コイツが自分たちの前で泣くわけがないと。

イジワル'ズはいかってまた何かをするかと思っていたが、もうする気もおきなかったらしい。

なんせこの件のせいで先生にも、男子にもサイアクな印象をあたえてしまったのだから。

まあ、そんなわけで沙弥はずっと昔から煉のことが嫌いだった。

けどそのせいで、沙弥は災難にあうことなど、沙弥も煉も知らなかった。

どこかで謎がうずめいている・・・

事件の前兆…（後書き）

読んでくれた方々、ありがとうございました！！

今回は煉と沙弥の出会いの話でいっぱいになってしまいましたが、次話でついに！

煉が天才的な頭脳を使って謎を解き明かします！！
お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2707ba/>

RENN

2012年1月8日15時50分発行